

## アンデックス修道院

寒くて陰鬱な冬が終わり、四月を迎えると、ドイツでは急速に日差しが強まり、春というよりはいきなり初夏の陽気になる。草木がぐんぐんと萌え出づる中、人々は浮足立って戸外に出て、久しぶりの日光を享受する。この時期バイエルンでは、待つてましたとばかりにビアガーデンがオープンし、爽やかな風に吹かれながら野外でジョッキを傾け、家族や友人と楽しく語らうのである。

鷗外は、雪が降りしきる頃にバイエルンへやって来たが、彼も久しぶりの陽光に誘われて、四月以降さかんに郊外の自然の中へ飛び出している。例えば彼は、バイエルン王家の夏の離宮、ニュンフェンブルク宮殿を訪れ、フランス風の庭園を散歩したり、ビア樽を持ち込んで木陰で酒盛りをしたりしている。また、テーゲルン湖まで足を延ばし、湖畔から山岳を望む「一幅の画図」のような絶景を堪能して、快適に昼寝をしたこともあった。

そんな春の行楽の中で、とりわけ印象深いのは、由緒あるアンデックス修道院への遠足である。

ここに日記の一部を引用してみよう。

医学生徒九人とアンデックス Andechs に遊ぶ。午前六時家を出で、汽車に上りてスタルンベルヒ Starnberg に至る。地スタルンベルヒ湖 Starnbergersee oder Wuernsee に臨む。此より歩いてアンデックスに抵る。村を過ぐる事四五。路傍耶穌磔柱の像多し。村民カトリック加特力教を奉ずるに因るなり。行くこと三時間アンデックスの丘に達す。丘湖に臨む。アムメル湖 Ammersee と名づく。丘上寺院あり。住僧に請ひて什宝を見る。後院内の醸房 Braustuebi に酌む。僧ヤアコツプ Jacob といふ者あり。醸酒管長たり。肥大にして遅鈍。家猪と鬃鬃たり。酒を行る者も亦皆緇衣。余覚えず絶倒す。余客と皆酔ふ。帰途車を借ふ。所謂梯車 Leitwagen なり。エムメリヒは毛布を纏ひ、尖帽を戴き、長竿頭に古靴を結び付け、之を推し立て、車首に坐す。生徒等皆狂歌す。興を尽して帰る。

現代語訳

医学生九人とアンデックスに遊行する。午前六時に家を出て、汽車に乗ってシュタルンベルクに至る。この地はシュタルンベルク湖を臨む位置にある。これより徒歩でアンデックスに赴く。途中四つか五つの村落を過ぎる。道端にはキリストの磔像が多く立てられている。村民がカトリックを信仰していることによる。三時間ほど歩くと、アンデックスの丘に到着した。丘はアンマー湖という湖を臨む場所にある。寺院

は丘の上にある。修道僧に頼んで家宝を見学する。その後、修道院内の醸造酒場でビールを飲む。ヤーク  
プという僧がいた。醸造所の長であった。肥えていて動作がのろく、まるで豚のようであった。酒を給仕  
する者もみな黒の僧服を着ている。私は思わず笑い転げた。私も客たちも皆酔っばらった。帰り道は馬車  
を雇った。いわゆる梯子車である。エムメリヒは毛布をまどって、先の尖った帽子をかぶり、長い竿の先  
に古靴を結び付け、これを推し立てて車の前部に座った。学生たちは皆狂歌した。楽しみを尽して帰宅し  
た。

興を尽くすというのは、まさにこういうことをいうのだろう。森や湖が点在する南ドイツの風  
光明媚な景観の中、若者同士で快活に歩き、何気ないことで大いに笑い、羽目を外して飲み、そ  
して「狂歌」する。この日記を読むといつも、古き良き時代のドイツにおける学生生活のもっと  
も輝かしい側面を垣間見る思いがする。と同時に、それを享受できた数少ない東洋人の一人であ  
ろう鷗外の幸運を思うのである。

しかし、この楽しいな記述には、「加特力教」<sup>カトリック</sup>というもう一つの主題が潜んでいることを忘れ  
てはなるまい。遠足の行き先が修道院であるからというだけではない。鷗外たちが歩んだこの道  
は、数百年の伝統を持つ巡礼の道筋でもあったのである。ベネディクト派の修道院として一四五  
五年に設立されたアンデックス僧院は、所蔵する聖遺物でつとに知られ、それを拝礼するために  
多くの巡礼者が訪れていた。むろん鷗外たちもまた、修道僧に頼んでこの「什宝」を見ている。

なかでも有名なのが、〈聖なる二つの祭餅〉<sup>ホスチア</sup>であった。ホスチアとは、聖餐に使うパンの薄片である。ミサではそれをキリストの聖体に見立てて食す。アンデックスに宝蔵されたホスチアは、グレゴリウス一世とレオ九世という二人の大教皇に由来するとされ、かねてより多くのカトリック信者を引き付けていた。<sup>1)</sup>

アンデックス修道院にはその他に、〈カール大帝の勝利の十字架〉や〈聖エリーザベトの花嫁衣裳〉など数々の聖遺物があつた。修道院が誇るこれらの宝物には、ある有名な逸話がある。僧侶から案内を受けた鷗外一行は、「什宝」を見学した際に必ずやこのエピソードを聞いたであろう。

その話に曰く、修道院が建つ以前、この地にはアンデックス伯爵家の城があつた。聖遺物は当時からこの城に受け継がれていたのだが、十三世紀に政争で家系が絶えてこの城が壊された際に、行方が知れなくなつてしまつた。それから百年以上たち、旧城の礼拝堂でミサが行われたとき、一匹のネズミが祭壇の床より出てきた。よく見るとネズミは聖遺物の切れ端をくわえていたという。そこで祭壇の下を掘り起こしてみると、ひとつの箱が埋められており、その中に先の聖宝が隠されていたのだつた。

このような神があつた遺物の再発見により、聖地としてのアンデックスの評判と名声はことさらに高まつた。それ以降、ますます多くのカトリック教徒が、各国より徒歩でこの地を目指した

のである。シュタルンベルク湖で列車を降りた鷗外は、アンデックスに向かう際に、この巡礼の道筋を共にしたのであった。その途中ひよつとしたら、大きな十字架を掲げ、祈りながら修道院を目指す巡礼者たちと出会ったかもしれない。浮き立つような遠足気分の中で、鷗外は、聖なる道程に漂う敬虔な気配をも察知したに違いない。

そのことは、彼が路傍にある「耶蘇磔柱の像」に触れていることから分かる。十字架に磔にされたキリストの像は、道端や街角などカトリック信仰の篤いバイエルンの随所で見られる。鷗外たちが通った巡礼の道には、単なる磔刑像だけではなく、キリスト受難の逸話を順に描いた里程標も立っていた。

さらにこの地方では、家の壁に描かれた神や聖者の絵でも有名である。鷗外は、後日シュタルンベルク湖に宿泊した際、ホテル付近の「漁家、皆壁に神像を画く」ことに注目し、「旧教の風然るなり」と改めてこの土地の素朴な信心深さに感じ入っている。鷗外がこのような民間の信仰に抱いた関心は相当なもので、彼は『うたかたの記』でも、「四方の壁にゑがきたる粗末なる耶蘇一代記の彩色画」に言及している。

さて、こうした巡礼の道程をたどると、丸屋根を頂いた塔が特徴的なアンデックス修道院が、「アムメル湖」を背にした丘の上に見えてくる。歩いてきた人々は、その超然たるたたずまいに感動し、長い旅路の終わりを知るのである。教会の内部に入れば、金色に輝くロココ風の華麗な



丘の上のアンデックス修道院。左下には、路傍に建てられた祠が見える。1937年の絵葉書より。

装飾と、十八世紀の名匠ヨハン・B・ツインマーマンのフレスコ画が、巡礼者たちを圧倒した。そして聖堂の最奥には、神威を表す絢爛な紋様を背にした聖母マリアの大祭壇が、天井にまでそびえ立って、燦然たる姿を見せていたのである。これは長旅の疲れが一度に吹き飛ばすほどの荘厳で見事な光景であった。

そして参詣の後、旅人たちの身体を癒やしたが、アンデックス特製の修道院ビールだった。ドイツの修道院では古くからビールが造られ、〈液状のパン〉として滋養のために院内でよく飲まれていた。アンデックスも例にもれず、伝統の醸造法が継承されており、修道院の名声はもとよりビールの醸造元としても広く知られていた。<sup>12)</sup>

鷗外たち若き大学生は、どちらかといえばこの方が目当てでアンデックスを訪れたに違いない。